



蘭 更翁
蒼 虬翁
4 崖翁

全部二册

芭蕉堂三代發句集

南無庵藏版

早稲田大学
文学部図書
53-7531



芭蕉堂三代發句集秋之部

洛東 公成 輯
皇都 謝風 技
周防 箕水

七月

立秋

七月也少子うられ火のともられ
籟りちりちり中子秋の立
秋の川も橋下石上秋の
ひらひら秋のひらひら
涼州

南無庵

秋の川も店もくろくひし土人形
冷たいゆきも秋の水も柏の風
穠のうららかなるも水もと
早つらぬもやまの目も入陸の夢
立舞のやまもしくも灯もまは
舞のうららかなるも水も
秋のうららかなるも水も
あつたうららかなるも水も
うららかなるも水も

今朝秋

迅起つて秋の夕もくろくひし秋

巻九

千歳

巻八

山の井乃花ハ咲くくろくひしの秋
人ひくく田中もまもくけさるも秋
まもはつて秋の夕もくろくひし秋
ひもあつて秋の夕もくろくひし秋
あつたうららかなるも水も
髪あつたうららかなるも水も
さつたうららかなるも水も
江の光もくろくひし秋
うららかなるも水も
けさの秋もくろくひし秋
秋の夕もくろくひし秋

巻九

この秋つゝまよひたる 後の事

草菴

うらうらと起てんかゝるこの秋
縁の道さなれりけしき味
二三の法水も 縁の道さなれり
吸いゝはさきくくもさなれり
大も尾をささきくくもさなれり
うらうらと起てんかゝるこの秋
串もさなれ木のさなれり
秋止の事さなれり

初秋

千崖

何となく秋も一りさなれり

葉の

さう秋もあつて起てはさなれり

葉の

さう秋のころ葉のほあし

住者の秋のせて出るおあし

さう秋もあつて起てはさなれり

神路もはさきくくもさなれり

さう秋もあつて起てはさなれり

木の葉に初秋のころはさなれり

子菴

さう秋もあつて起てはさなれり

残暑

昔侍りし時こそうき風を

中よしの秋の風を思ふも日影の山

稲妻

稲妻の光をうつらうつらと秋のそら

りよあつちやとくも人かき枕

稲のほらやをみよのまのりつら

稲妻のそよあまの水にむかひあか

りぬけちや人よちやま持てお

稲妻のちこよりあの方けたか

きうけちや稲妻のよあが

りよあまのちやうはしあまのち

夏更

考れ

稲妻の光をうつらうつらと秋のそら

子更

花火

多竹の中ははは花火の

夏更

伏見か

つよもあまのちやうはしあまのち

夏更

七夕

七夕のひかりをうつらうつらと秋のそら

なまのちやとくも人かき枕

七夕のちやとくも人かき枕

あまのちやとくも人かき枕

あまのちやとくも人かき枕

とほよりちのほりねきちのちのち
七のち秋のちのちのちのち
恒ちのち七のちのちのちのち

子山

星

修のち世のちのちのちのちのち
はのちのちのちのちのちのち
星のちのちのちのちのちのち
年のちのちのちのちのちのち
星のちのちのちのちのちのち
星のちのちのちのちのちのち

子山

子山

鉄河

あるちのちのちのちのちのち
かき川はのちのちのちのちのち
横のちのちのちのちのちのち
ふのちのちのちのちのちのち
もとのちのちのちのちのちのち

子山

盆

ちのちのちのちのちのちのち
盆のちのちのちのちのちのち

子山

盆

えのちのちのちのちのちのち
道のちのちのちのちのちのち

道のちのちのちのちのちのち

鬼待

くさくさたるものよ遠くをの盆の月 千代

魂祭

半歩もあつておのゝ刻の影 宗定

柳原の宿ひへ

息災ふくまひのまはるる魂のま
あはれし一瞬ありきまはるるあはれ

あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる

あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる

魂棚

あはれとまはるるあはれとまはるる 千代

あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる

送火

送火のあはれとまはるるあはれとまはるる

燈籠

あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる
あはれとまはるるあはれとまはるる

切籠

切子まゝに入れたる切籠の意
毛今こけし切籠の意は松
夕時やまゝに提げ籠の所
あしぬし子まゝのけし切籠

軍更

大文字火

大文字はらうらむの意は
大かきし切籠の意は
大まゝの意は籠の意は

軍更

いさみまゝの意は籠の意は

軍更

躍

目ひく切籠の意は躍の意は
まゝの意は切籠の意は
あゝの意は切籠の意は

軍更

荷葉飯

いさみまゝの意は切籠の意は
いさみまゝの意は切籠の意は

軍更

刺鯖

いさみまゝの意は切籠の意は
いさみまゝの意は切籠の意は

軍更

秋風

朝川やあはれ入るりの中
手あはれは海を渡る
魚持てまゝに松根をわらう
秋風
秋風よあはれつゝもこころが
秋風よ海を渡るも秋風よ
早多きあはれつゝも秋風よ
秋風よ山を渡るも秋風よ
松林の常態も秋はあきの風
秋風よあはれつゝも魚の骨
ま羽の浦より

集更

秋風色くともをほらうとさうね

斗畢菴少

秋風や川辺の庵を先二人
秋をよも夢の海を越え 槭のおと
あさうせやうとこい福の鶴石
秋風やあはれつゝもあきの雲
晴のあはれつゝも吹らう秋はれ
秋風や解はさひは強 勅堂
つゝあはれあはれつゝも秋の風
瘴骨よりつゝもあはれつゝも秋の風
秋風やあはれつゝもあはれつゝも

秋風のよらうり 初る葉 細うれ
日とくく 山嶺のまきくく 秋の風
秋風や人 嘆くや 秋の風
あきも 果は 秋の風
水と 秋の風
浮んと 秋の風
竹と 秋の風
秋の風

蒼風

秋の風をよらうり 初る葉 細うれ
日とくく 山嶺のまきくく 秋の風

秋聲

鼓う浦

秋の風をよらうり 初る葉 細うれ
日とくく 山嶺のまきくく 秋の風
秋の風

秋空

書く 秋の風をよらうり 初る葉 細うれ

江とくく 秋の風

秋雲

きよ山や暮るゝえゆは秋のま
詠み〜こ東乃後の秋のま〜

早きう〜は安を惜て秋はま
たらのひ〜る秋の杉や秋雲

卯山卯堂

山さ〜や穠〜う〜はまなりの寺

一日もお〜〜秋のち

石山さ〜ら〜秋のち

さ〜山な〜〜あ〜

秋雨

秋もや〜さ秋槌の絶作

或るに老僧は佛の影をうらに

あ〜ま〜に秋もや佛の影

田山直子抄

秋もや〜出さあ〜ぬ〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜

あ〜れ〜ら〜み〜

さ〜〜〜〜

年〜時〜ら〜

殊〜雨〜や〜

策頁

琴元

楚江の妻を懐くつらね

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

子の戸をぬかす思はれ秋の雨

所の前よりあはれ思はれ秋の雨

秋野

秋の野をゆく思はれ思はれ

一葉

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ

あはれ

散

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

留別

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

木槿

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ詠を針も結ゆく秋雨

あはれ

女郎花

くらゐのこゝろに花の影をうつす
 けさの朝も花の影をうつす
 朝の光を花の影がうつす
 暮の光を花の影がうつす
 あまの光を花の影がうつす
 雨の光を花の影がうつす
 雪の光を花の影がうつす
 霧の光を花の影がうつす
 雲の光を花の影がうつす
 月夜の光を花の影がうつす
 花の影を花の影がうつす

桔梗

夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす
 夕暮の光を花の影がうつす

菫

風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす
 風はも先んづかす

湖のなまじり

枝のや穂をさすよきささくれ波
鳴りのや穂をふそむるささくれ波
大さの穂をさすよきささくれ波
つとむるもささくれ穂のよ
子穂のよをさすよきささくれ波
子穂のよをさすよきささくれ波

養乳

蓮實飛

蓮のや穂をさすよきささくれ波

團更

萩

萩のや穂をさすよきささくれ波

茗

萩のや穂をさすよきささくれ波
魚のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波

茗乳

茗更

萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波
萩のや穂をさすよきささくれ波

茗乳

雪のつらみ したる ぬるき 雪のつらみ
山伏の法 せむき 志のつらみ 芒のつらみ
水きり 山麓の 志のつらみ 雪のつらみ

雪 兎窟に やまは 日と 秋の 雨
いし 志のつらみ 雪のつらみ 見風 雪のつらみ
けむり 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
たうた 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
けむり 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ

侍人 けむり 雪のつらみ 雪のつらみ

日と 西の 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
山中 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ

雪の花

雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
山中 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ

小野 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ
雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ 雪のつらみ

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

あまのこころをよめるはなはた

草

竈馬

倒るやとるり中は隠す
 餅とておととあつり 菖
 り物とては後ちまゝとる 子
 扱とては 子
 ちるは 子
 眞のまゝとては 子

等は 子
 竈のまゝとては 子
 りるは 子
 眞のまゝとては 子

蟬

暮

小あつとては 子
 りるは 子
 眞のまゝとては 子

~~~~~

みはとては 子  
 りるは 子  
 眞のまゝとては 子

廣鳴

わとては 子  
 りるは 子  
 眞のまゝとては 子

玉虫

蜻蛉

玉手もよもよあはれはりせ橋

秋暉

とこよ子のこぼれはるるきりけ

路より身を修むるも秋の輝

あまの秋輝あまのまのあまのま

まのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのま

鯛

日くくもこの山えは山はら

あま

秋螢

秋の螢をふりよもよもあま

あま

秋蚊

秋蚊

ふり蚊をふりよもよもあま

あま

鹿

あまの鹿をふりよもよもあま

あま

あまの鹿をふりよもよもあま

あま

あまの鹿をふりよもよもあま

あま

あまの鹿をふりよもよもあま

あま

新十匹字を詠りて其の  
又其の又其の又其の  
山も其の也其の其の  
うらも其の也其の其の  
吟も其の也其の其の  
小男も其の也其の其の  
其の其の也其の其の  
あつた也其の其の其の  
鹿の角も其の也其の  
鹿も其の也其の其の  
あつた也其の其の其の

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

意して其の其の其の

春秋傳の

其の其の也其の其の  
たつた也其の其の其の  
留も其の也其の其の  
夕山も其の也其の其の  
江も其の也其の其の  
はも其の也其の其の  
くも其の也其の其の

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

鳥

うらも其の也其の其の

鳥

鳴

秋をたぬのうへにおもひなり  
鳴ちゆくゆきせしは古江にま

西行上人の巻

鳴ちゆくゆきせしは古江にま

ちりゆきせしは古江にま  
ちりゆきせしは古江にま

鷓

鷓鴣の風をくまぬまふらふ

風をくまぬまふらふ  
風をくまぬまふらふ

鳴子

案山子

あらしのうらみしきりしきり

鳴子

あらしのうらみしきりしきり  
あらしのうらみしきりしきり  
あらしのうらみしきりしきり  
あらしのうらみしきりしきり

あらしのうらみしきりしきり  
あらしのうらみしきりしきり

御射山祭

山道ゆかりのしづかに  
あそびのこころを  
あつたさへりちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

御射山祭

伊あらしちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

八朔

八朔ちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

秋寒

秋寒ちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

夜寒

夜寒ちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

朝寒

朝寒ちあつたさへりち  
あつたさへりちあつたさへりち

卯寒



暴風

初之そそ 秋をむかへたる枝うま  
戸の明を月をみたるあつたを  
ほ山の舟のみのつらねの尾うね

角田川

あつたをむかへたるあつたの都々

秋暮

今もつらねをむかへたるあつたの都々  
小舟をみたるあつたの都々  
秋の暮るに枝のあつたの都々

あつたの都々

あつた

あつたの都々  
あつたの都々  
あつたの都々

あつたの山々

秋日

あつたの都々  
あつたの都々  
あつたの都々

あつた

あつたの山々

秋夜

あつたの都々  
あつたの都々  
あつたの都々

あつた

礎 長夜

あふみのふ人きつりし松のきり  
林しきしそこもしきあまきり  
秋の夜はきりきりきりきり  
まうもあわきりきりきりきり  
ひきりきりきりきりきりきり  
きりきりきりきりきりきり  
松風石出きりきりきりきり  
浪きりきりきりきりきりきり

客中

長夜  
三更

初月

あふみのふ人きりきりきりきり  
林しきしそこもしきあまきり  
秋の夜はきりきりきりきり  
まうもあわきりきりきりきり  
ひきりきりきりきりきりきり  
きりきりきりきりきりきり  
松風石出きりきりきりきり  
浪きりきりきりきりきりきり

金澤

客中

二月廿日

和月や竹をまわして山掃き

子日禮

松の葉を木の葉に似せしむるの力

子日禮

こころをわきまをわきまにまわすの勢

子日禮

松先のまわしをわきまにまわすの力

子日禮

待言

かたがひを伏せしむる

月代を先ずしりあいのやむる飛

子日禮

名有

名有にしりあいのやむる飛

子日禮

名有にまわすの勢をわきまにまわす

子日禮

名有にや入山やまのまわすの勢

子日禮

名有にや産路のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

名有にや松火のまわすの勢

子日禮

今日月

名月やあまのついでに  
あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに  
あまのついでにあまのついでに

良夜雨

かこいしきよなる夜  
うむすしきの花のあま

八月十五あまのついでに  
あまのついでに

月のあまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに

良夜のあまのついでに

竹ひしきよなる夜  
あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

月今宵

あまのついでにあまのついでに  
あまのついでにあまのついでに

あまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに  
あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでに

家毎に銀は入り月をいひ  
月と會ひぬるくもをりたり  
月あふればつるをたふし

巻八

月見

系親のそれとあらうそ月えうね  
炭あんとこころ程も月えうね  
誘ひあつたらぬとあな月えう  
さあしつるをりつるをりつるをり  
火をうきぬらうはな月えうね  
鳴らしてあまの他の月えうね  
出づるをりつるをりつるをり

巻八  
巻九

落のな土橋のよは月えうね  
多つらうとあまをきよ月えうね  
景観つるをりつるをりつるをり  
今けつるをりつるをりつるをり  
火橋つるをりつるをりつるをり

十  
十一

十六夜

うらひはつるをりつるをり

十とあつた月よはつるをりつるをり  
十とあつた月よはつるをりつるをり  
うらひのつるをりつるをりつるをり  
うらひのつるをりつるをりつるをり

巻八

巻九

月

|        |      |     |     |    |    |   |    |   |   |   |   |   |   |
|--------|------|-----|-----|----|----|---|----|---|---|---|---|---|---|
| 月      | 〃    | 〃   | 〃   | 〃  | 〃  | 〃 | 〃  | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| かきつばたの | しづかな | うらぶ | なみだ | あふ | くさ | さ | しづ | か | き | つ | ば | た | の |
| ついでに   | あま   | な   | な   | な  | な  | な | な  | な | な | な | な | な | な |

旅行

多摩川を舟より眺める旅うけ

留別

便さし月二見おきく石

瓶巾馬見井

只ちあめ降りのみち中水の内  
ほろりもうる男の月おぼろり  
志さくさくを獲るたのち月のお  
あつらひる有骨たつし月のま  
おしぬひおしぬひゆく月の光  
ほろりおとれちのちつ月のま  
くさくさく降るさくさく山の月

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

春帆

望月

月〜らや〜か〜人〜あ〜け〜や〜ひ〜ど  
 葉おし〜を〜た〜の〜を〜返〜た〜け〜存  
 思葉〜〜て〜戸〜さ〜〜入〜ぬ〜月〜の〜の  
 光〜り〜月〜中〜〜〜降〜ふ〜  
 身〜ひ〜〜子〜る〜風〜吹〜月〜さ〜ん  
 見〜〜〜ち〜れ〜月〜志〜〜〜〜に〜テ〜の〜子  
 唯〜〜〜け〜ハ〜は〜み〜〜〜〜と〜の〜ま  
 秋  
 月  
 せ〜れ〜る〜と〜と〜と〜と〜秋〜の〜月  
 松風を明〜〜あ〜〜似〜〜秋〜の〜月  
 蒼  
 帆

和紅葉

新〜あ〜〜の〜を〜免〜て〜秋〜の〜月  
 雲〜け〜〜夜〜ほ〜〜と〜〜秋〜の〜月  
 又〜〜〜け〜〜と〜〜と〜〜と〜秋〜の〜月  
 野〜〜〜あ〜れ〜ハ〜や〜〜〜〜秋〜の〜月  
 傘〜〜〜〜〜家〜ハ〜〜〜〜秋〜の〜月  
 叢山〜〜〜〜〜あ〜け〜〜〜〜秋〜の〜月  
 水〜〜〜〜〜は〜〜〜〜〜秋〜の〜月  
 和紅葉  
 淵〜ふ〜と〜水〜〜〜〜と〜〜と〜と〜と  
 東漢傳〜〜と〜と  
 枕〜〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 山

花野

南波庵の春

おりーろきと庭や花やお申合ふ

花世

ふきとこ身や疎くを招きとらう

撮くは弓矢うら好まむすしお

又泥志ぬお登六云道し花音

花世おまひおあつきを吹野ん

芒徳

とう舟や地ふつーをや薄の梅

梅のむらあまらうとむらう

又

又

又

又

又

又

又

又

又

分りもやまー薄の梅もあへ

又

雀麦

刈草うらほしよの秋の花あつそ

又

雀まなや庭うらおの秋一在何

又

うらまもあへしとら好つらおん

又

露草

毛の草おとらうはほくあつそ

又

毛の草おとらうはほくあつそ

毛の草おとらうはほくあつそ

毛の草おとらうはほくあつそ

雞頭



黍

燕

野原のうらやまのやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと  
 野原のやん 白のふと

今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ  
 今も昔も同じ

芭蕉殿

俳句

柳をよみては芭蕉の破る

病中吟

芭蕉のよみては破る

菖

水は清くは菖の葉

菖の葉は清くは水

葛根堀

袖白くは葛の根

葺狩

葺狩也 弓矢りつ 好む ちりせり  
羊 好 ちり ちり 木 の ちり  
ほり ちり ちり ちり 菌 持

初葺

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

田刈

ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
ちり ちり ちり ちり ちり ちり

新芝草

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり

ちり

ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

花園

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

初雁

ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
ちり ちり ちり ちり ちり ちり

鷹

ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり

ちり

日向をうけて新風疾もあつて一羽  
 あつたやうにひらきまわつて天は丁  
 とは居る小田のえり口をくわいて  
 夕暮りやうやくして小田の居  
 りをうけて色もあつて居る丁の  
 浮きもあつて居る丁の羽  
 松のしほのあつて居る小田の丁  
 ちやうどしほのあつて居る丁  
 松のしほのあつて居る丁の  
 うつらうちの松のしほのあつて居る山  
 夕暮りやうやくして居る丁

居るあつちの松のしほのあつて居る  
 葉のしほのあつちの松のしほのあつて居る  
 葉のしほのあつちの松のしほのあつて居る  
 の松のしほのあつちの松のしほのあつて居る

傍中やうやくのあつちの松のしほのあつて居る

秋のあつちの松のしほのあつて居る  
 唯川の松のしほのあつちの松のしほのあつて居る  
 葉のしほのあつちの松のしほのあつて居る  
 葉のしほのあつちの松のしほのあつて居る  
 鯉鮒のしほのあつちの松のしほのあつて居る

渡鳥

世々... 考らぬ

啄木鳥

木つち... 山木原 夏更

鯉

つら... 鯉

きう... 鯉

ゆ... 鯉

藻

藻... 藻

落鰯

さ... 落鰯

新酒

ひ... 新酒

右の月

家... 右の月

の... 右の月

ほ... 右の月

清... 右の月

り... 右の月

も... 右の月

う... 右の月

ま... 右の月

上京の由りて... 晴ぬのちも月  
水と出くあゝ... 一層の月  
十二夜  
子 峯

十三年... 秋の夜更  
園更

露時雨  
秋時雨

秋時雨  
秋時雨

菊  
土山と... 秋の... 色  
あき

菊  
菊の... 色  
あき

菊  
菊の... 色  
あき

菊  
菊の... 色  
あき

菊  
菊の... 色  
あき

菊  
菊の... 色  
あき

つねのまはらうらなをよみしはかき  
まゝにうらなをよみし

あはれはもほのふゆきまゝくろあ  
まゝにうらなをよみしはかきの

柳陰影はらふくはらふくはらふく  
時世新まうらなをよみし

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく

菊あはれはらふくはらふくはらふく  
山影はらふくはらふくはらふく

甲原はらふくはらふくはらふく  
まゝにうらなをよみし

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく

山影はらふくはらふくはらふく  
まゝにうらなをよみし

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく

まゝにうらなをよみしはかきの  
花影はらふくはらふくはらふく



けのあそびにそ 何れもさあ  
紅き木 焚きて 煙のりは 枯るる  
ふ山の ももも 夕ぐれあめのは  
雲 沈む 岫の ももも 霧の 中  
さうらうの 月あか

通天橋のそと

紅き山に 橋を かけ せめて  
あまの 橋を けり 谷の 紅き  
さうらうの 橋を けり 谷の 紅き  
よもぎの 木 結を のよる

登り橋のそと

葛紅葉

紅葉の 夕ぐれ 水あめ 中の 霞  
ももも 夕ぐれ 水あめ 中の 霞

子月

あまの 橋を けり 谷の 紅き

雲更

中つら 光る 朽木は けり 中  
風 鈴を けり 中つら 光る 朽木は けり

尾花散

半はら 尾花 散り 吹やむ 月あか

草實

さうらうの 草 實を けり 中つら

木實



中人より来たる山鴉

壽山真あり

命より梅や好むを言を結ふ

椿実

高野村より梅の香りと見出  
いかにちよとくもあはれ

あはれ

杖より梅の香りを結ふ

椎柴

梅の香りを結ふ

香丸

椎

栗

赤い栗と黒い栗。山家の

栗

谷に梅の香りを結ふ

この栗は梅の香りを結ふ

鈴鹿あはれにちよとくもあはれ

あはれにちよとくもあはれ

栗の香りを結ふ

栗

柿

ふるふる柿の香りを結ふ

栗

人の衣の香りを結ふ

梨

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

落水

あはれものこころに秋の風を吹かす

柚味噌

あはれものこころに秋の風を吹かす

行秋

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

暮秋

あはれものこころに秋の風を吹かす

夕更 夕更 夕更

秋

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

あはれものこころに秋の風を吹かす

夕更

経巻に記す松の葉のついでに

布施の海

りつゝも月りつゝもふせは秋

おもしろけし何とおのちも松葉

くぬぬつゝ松葉つゝ名も松も

りつゝも月りつゝも

うねりも松のうねりや大なる

うねりも松のうねりや大なる

不破あり

何れもつゝも松のうねりや大なる

白馬城の松のうねりや大なる

松のうねりや大なる

奥山、松の葉のついでに

越後の松の葉のついでに

あつゝも月りつゝも

秋之部 畢

御筆論 杉丸 杉と 杉と

甲申 杉丸 九月 修徳院

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

芭蕉堂二代發句集冬之部

洛東 公成 輯

皇都 山奥

佃馬 梅城 技

十月

十月 杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

十月 杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

十月 杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

神無月

十一月 杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

十二月 杉丸 杉丸 杉丸 杉丸

小春

松花をよみよみし小春の入りぬ  
あつたつたのよき花経来山  
高橋をよみたりとは小春の飛

軍更  
子光

松花のあつたつた紀の傳次

あつたつたあつたあつた

日も水もやよきあつた松花

子光

霧きつたつたつたのあつたあつた

子光

小六月

羽をよみよみ松の式も小六月

軍更

初時雨

初時雨のあつたつたあつたあつた

軍更

りあつたあつたあつたあつた

市中也あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

ふるまはるるのたぬぬ朝あつらひの時の  
編りてみえぬなとこらわ初めまは  
かまらぬお水のるんてとらつ時  
あつておくまを流つてわ初め雨  
芥火に細にあげてとらつて  
一帯ハ驚もつらつてわ初め  
は降るともむ二んはとらつて

は幸いなるのちつてとらつて  
先令はつてはとらつて  
お構ふつてはとらつて  
の物種なるつてはとらつて

岸にゆきま水西よりつはもさし  
あつてつてはとらつて  
ぬらつてはとらつて  
おのつてはとらつて  
おのつてはとらつて

時雨

初りてはとらつて  
あつてはとらつて  
あつてはとらつて  
あつてはとらつて  
あつてはとらつて

神祇教とらつて

時雨のこゝろに西風通るさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくら鬼女の面  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら  
時雨のこゝろにさくらさくらさくらさくら

さくら  
さくら

ひらひらとさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら

田

佳景をえり人をあはれむらる  
山景をいふはむい

夕山や夕の影をいふはむい

ゆきみ

ひらねの影をいふはむい

きりぎりす

砂浜に志くねるるをいふはむい

松の影をいふはむい

斧の影をいふはむい

廻板の影をいふはむい

松の影をいふはむい

用

ふゆの影をいふはむい 千花  
松の影をいふはむい

木枯の影をいふはむい 葉更

風の中をいふはむい

あつたをいふはむい

こかたをいふはむい

身延山

こころをいふはむい

鹿の影をいふはむい 雪  
北

本枯の影をいふはむい



あつし乃吹のなをん強き山  
風中掃のまをむ智のま  
こくもをむと松を吹く

敦智よ

本枝の浪吹くけくうねう時

須磨め

風の中うき海の中あつ  
思ふあつてはく庵のま

冬籠

冬籠りて史記よむと来ゆる  
也くはくもあつて冬籠

三文

冬籠りて禁火の星は照鏡の  
炭二億の掃く積り冬籠り  
冬籠りて繁葉の世あつて  
約東に松風吹く冬籠り  
鈴ひら鉄のけりあつて

冬籠

冬月

冬月撫を去るさつて  
あつてあつて中のあつて  
戸口から草の院花をの月  
けあつて人け居るあつて

三文

冬籠

寒

晴月 曾陸亭とていついふも  
にふゆつはちやふも日の中  
まはりのくま

ふくむくおひつとまし山の庵

園更

まじしとて思沈むる 藤はく

まじしとて古物 庭は足袋の形

森あひつてね解のまはるをい

車 蓋の草戸をね

まじしとて戸さけふ庵の松乃月

多別

流るまじぬ 静戸出まを山辺

腰 却り

まじしとて暮をね 義さす

冬 丸

まじしとて 塚のふ松乃 物もま

丹後の内室

ねまじしとて 花の中乃 日も

霜

朴のまじしとて 木や 松

果 更

ひあまじしとて 犬のぬき 木

栗 拭くまじしとて 木や 石

思まじしとて 木や 二 木

別まじしとて 木や 木



雪

白雪のふりかざるは都  
 幾とゆる水もあつちの  
 鹿もたはらぬもみぢの  
 きの竹月を解けたり  
 田のまがはる雪の  
 牛山は吹雪の  
 海もゆるもみぢの  
 叶も根はたはらぬ竹  
 白の雪もみぢの  
 降るはゆるもみぢの

五更

雪のふりかざるは都  
 不~~し~~ゆる水もあつちの  
 おもたはらぬもみぢの  
 まりもゆるもみぢの  
 降るはゆるもみぢの  
 猪もたはらぬもみぢの  
 角もたはらぬもみぢの  
 北山もあつちの  
 夕もたはらぬもみぢの  
 おもたはらぬもみぢの  
 見ゆるもみぢの

あけふのちさうさうさうさうの塔  
并雨をうけにさるる下り石  
りけえんし杉の海苔のそねが  
支鶴真りき  
早やち塔のかあさきさね  
其旗の旗さく  
跡りさうさうさうさうさう  
留別  
登りさうさうさうさうさう  
安田の能海さく  
隆りさうさうさうさうさう

海のさうさうさうさうさう  
後片りさうさうさうさう  
素然一月さう  
廻りさうさうさうさう

四十余年の知已さうさう五十年  
おさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
あさうさう

清さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう

まのふとねしつるもあつ小笠原  
隣りつとをらみみ野山く南  
一人あみねりりつとをこの世  
枝たきつとをいふえきつとをい  
ゆつとをいふ松と竹つとをいふ  
雪はつとをいふ白きの中をたつと  
日に向つとをいふ赤つとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ

養  
乳

鳥はつとをいふつとをいふつとをいふ  
旅あせつとをいふつとをいふつとをいふ  
芦と船つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ  
つとをいふつとをいふつとをいふ

隆たよぬ雪を明石に染みぬ  
雪の如きやまの雪の雪田が  
よた流持くもぬる雪の雪  
大雪とあつらうとぬる雪の雪  
松明もくそぬる雪の雪

群鷗真る雪を

か〜雪の雪の雪の雪の雪

越後妙法寺を

垣朽くくぬる雪の雪の雪

氣比濱岨を

大雪は雪とくぬる雪の雪

木つまは一をくく木をくぬ  
雪の雪を先り先り雪をさ  
月ささくくくぬ雪佛  
ぬてまて神をくく竹の雪を  
ぬるぬる雪の雪の雪の雪  
ゆかまぬる雪の雪の雪の雪  
ま〜ぬる雪の雪の雪の雪  
入月の下まぬる雪の雪  
雪の雪をぬる雪の雪の雪  
雪の雪をぬる雪の雪の雪

千唯

飛弾の山崎を

霞

鹿ひくくさくの藤栱(さくく)  
庭(にわ)の月(つき)を(を)照(て)る  
雪(ゆき)の(ゆき)の(ゆき)の(ゆき)  
栱(かま)の(かま)の(かま)の(かま)  
く(く)の(く)の(く)の(く)の  
あ(あ)の(あ)の(あ)の(あ)の  
い(い)の(い)の(い)の(い)の  
雪(ゆき)の(ゆき)の(ゆき)の(ゆき)  
野(の)の(野)の(野)の(野)の  
ふ(ふ)の(ふ)の(ふ)の(ふ)の  
き(き)の(き)の(き)の(き)の

粟

氷

鈴(すず)の(鈴)の(鈴)の(鈴)の  
矢(や)の(矢)の(矢)の(矢)の  
お(お)の(お)の(お)の(お)の  
か(か)の(か)の(か)の(か)の  
い(い)の(い)の(い)の(い)の  
氷(こおり)の(氷)の(氷)の(氷)の  
舟(ふね)の(舟)の(舟)の(舟)の  
河(がは)の(河)の(河)の(河)の  
凍(こも)の(凍)の(凍)の(凍)の  
入(いれ)の(入)の(入)の(入)の



砥澤

切くくくくくくくくくくくく

かたかたかたかたかたかた

甲のけ先をき

氷しよおくねをせり一羽の色

衣の隙をき

うわらうわらうわらうわら

飯後の飯

不二えんといふうらやまをう

星きくくくくくくくくくく

きんぎょを植たまらぬ。ささけ

きんぎょ

火桶

相の突けをぬれぬきう厚い

一草亭

水桶ふねあまうへい入り

火桶

多きを延てなゆきき相火桶

まけりも机の下に相火桶

孝経よみ孫の岩つゝ火桶が

少し物を存ぬく火桶の

相火桶結くくくくくくく

一とくはりてあまのせ

ま

ま

楯火

一  
文

一  
唯

炭

一  
園更

大は通れ鬼はよもぎりの構ゆり  
楷の少やゆり構をぬり垣を  
酔も少や楷の少やぬりぬり

おとりの色眼をみるもよもぎりの炭  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

一  
登也

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

頭

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

一  
馬文

紙

炭の少やゆり構をぬり垣を  
炭の少やゆり構をぬり垣を

一  
-

十五

紙衣

土衣の如く人多に紙衣を  
荒山ありしもの好まざる  
ありしもの好まざる紙衣を  
あらくしつて紙衣を  
あらくしつて紙衣を  
あらくしつて紙衣を  
あらくしつて紙衣を  
あらくしつて紙衣を  
あらくしつて紙衣を

蒼紙

軍衣

手紙

千紙

軍衣

蒲團

波はらり七舟の庵の蒲團

帰花

帰花一掃をいふ草  
名りしきぬ木の根ありぬ海り也  
草布を好むるものありぬ  
名はれぬものありぬ  
名はれぬものありぬ  
名はれぬものありぬ  
名はれぬものありぬ  
名はれぬものありぬ

軍衣

散紅葉

もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし  
もも紅葉をいふし

蒼紙

落葉

晴るを叶枯りしうらふ庭のまはら  
山をふれはひくく庭のりる庭をまはら  
まはらまをとりまはらるる落葉のね  
庭のまはら合ふまはらあるまはら  
大川をまはら越へてまはらまはら  
おももふまはらまはらまはら

馬更  
千崖

木葉

けららけりやまをまのまはら  
ちのちとけりまはらまはら  
白鷺よあはは自然のまはら  
ほそくこのまはら天をまはら

巻八

くははゆはまはら

まはらまはらまはら

客中香花とまはら

おはらまはら

あはらまはらまはら  
あはらまはらまはら  
あはらまはらまはら

冬木立

あはらまはらまはら  
あはらまはらまはら  
あはらまはらまはら

馬更

ふゆのうらまゝのうらまゝのうらまゝ

かきつばたのうらまゝのうらまゝのうらまゝ

こちのうらまゝのうらまゝ

もろのうらまゝのうらまゝのうらまゝ  
一林掛のうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

枯柳

初冬のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

山茶華

山茶のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

山茶のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

山茶のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

冬牡丹

山茶花よりうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

君の代に枯風をいぬ冬牡丹

うらまゝ

寒菊

寒菊のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

寒菊のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

寒菊のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

寒菊のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

寒菊のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

水僊

余のうらまゝのうらまゝのうらまゝ

うらまゝ

古きやもろくもまはれ水仙花  
水係は名所くくは月あられ  
あはれやあまのあまのまはれ  
まはれはまのまのまのまはれ  
水仙花のまのまのまはれ  
あはれやあまのあまのまはれ  
水仙花のまのまのまはれ

冬更

冬枯

冬枯色はあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ

冬更

冬さき

冬枯のまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ

冬更

枯野

枯野のまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ  
あはれはあまのまのまはれ

冬更

枯尾花

りたれぬ力やこころを照らす  
まじりてあはれ枯尾花 枯尾  
山崎のやうに 枯尾花  
水邊のやうに 枯尾花  
をうらむ 枯尾花  
酒にちる 枯尾花  
霧のちる 枯尾花

五更  
夕九

まじりてあはれ 枯尾花

悼貞松

うらむ 枯尾花

枯蘆

枯草はり 枯蘆

五更

まじりてあはれ 江の東

枯芒

一天のまじりてあはれ 枯芒

夕九

枯葛

まじりてあはれ 枯葛

枯葵

冠の葉うらまへし 枯ひし

草丈

石落危

あつしに力おこしし

草丈

大根引

奥山よりはりし

草丈

系畑の早下りし

草丈

あつしに大根ぬきし

草丈

大根引お城のえりし

草丈

志賀の

大根引志賀の人集の掛ひし

草丈

千鳥

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

あつしに少きし

草丈

西



あつたよきしるしとておのふり  
ひつたおのふりつたおのふり  
さくさくおのふりつたおのふり  
川ちりおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
さくさくおのふりつたおのふり  
湯豆おのふりつたおのふり  
夕おのふりつたおのふり  
波入おのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり

あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり

有明のまはれ

あつたおのふりつたおのふり

あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり

あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり  
あつたおのふりつたおのふり

千産



鴛鴦

折あゆやうとさうりひらけし  
つらき羽を振るやあんなにさう  
鴛鴦はあつちやうつらきさう  
おとくはんつらや眠るはし

系文

系文

鷹

おとくはんつらや眠るはし

系文

木兔

うさぎや仲春下はまゆき  
うさぎのうさぎ  
木兔や何そしたし

暖鳥

ぬくあつちやうとさうりひらけし

冬鶯

候あはうらむを雪ふらむ

鳴

あつちやうとさうりひらけし  
あつちやうとさうりひらけし

鷓鴣

竹伐は暎らうらうら  
株のまをほらうらうら  
あつちやうとさうりひらけし

野中より能登市より出たる鯨鯨  
谷水より出たる鯨鯨  
蔓つらひな根くりり 鯨鯨  
結搦ふりり河内より出たる鯨鯨  
有  
有  
有

綱代

松原の篠原 篠原の篠原  
細代守より出たる鯨鯨  
とがしとがし 篠原の篠原  
細代守より出たる鯨鯨  
細代守より出たる鯨鯨  
有  
有  
有

縣搦とあるはまの地あるはま

夜具引

夜具引 入替入 入替入  
夜具引 入替入 入替入  
有  
有  
有

河豚

河豚 世の中や月よむ 河豚  
海を渡る都おもしろし 河豚  
多仙は花よむ 河豚  
鯨汁やと會枯せの 河豚  
有  
有  
有  
有

鯨

乾鮭

鮭の干し物也 命を結ぶはり上  
干し鮭は 月持りしう魚の柄

軍更

納豆

大豆の干し物也 命を結ぶはり上  
乾鮭也 命を結ぶはり上  
乾鮭也 命を結ぶはり上

倉乳

戎構

戎の干し物也 命を結ぶはり上  
一可なりしう魚の柄

軍更

十夜

十夜は 命を結ぶはり上  
十夜は 命を結ぶはり上

倉乳

芭蕉忌

芭蕉忌は 命を結ぶはり上  
芭蕉忌は 命を結ぶはり上

軍更

芭蕉忌は 命を結ぶはり上

芭蕉忌は 命を結ぶはり上  
芭蕉忌は 命を結ぶはり上

芭蕉忌

芭蕉忌は 命を結ぶはり上  
芭蕉忌は 命を結ぶはり上

倉乳

翁居のこちのくり枯のむら  
ありしち

朱山けしうのさよゆいしお時白  
りつしけの水はらあゆさうの極  
番あうら指を袖は冬式うの  
掃くせしきまの標しんるの衣  
系命の元余の六十あつぬりあ  
水仙やまこいさうくはる向子  
洞は乃翁居

安徳の盛りにあまふしせしあつる  
十年のあゝ本母さうをじしあ

八庵の筆をくし

十もろり持り本におくさ成るの  
義仲さう  
あつしけの標をあらはしえむら  
あつしけの標をあらはしえむら  
ま向するの標のまあふれれり  
赤くおしけあつしけの標をあらは  
木鬼におをすまふさやせ翁の  
孟冬雑

夫田の標け通る

冬の旅やけしけしけしけしけ  
ふあ

秋を月世のあやうし故翁は湖東  
行旅の迹を去らば日野山は辺を  
に刺さるはかたきそわはひびき  
とせうしゆんをむしあしりて  
は代のまろしあふ山もあはら  
林も細くうらて白波のぬいもあ  
せうくう紫英直つさうて志ん  
けいせとよ

刺さるはあまきうぬ今うら  
あしきも骨と本うらゆせの冬  
あしきもあまきうぬははき

公水う終波より居は故高り

きのりしは恒初やあはたの雪  
終る水はなまら小まきとむし尾花

霜月

そお月やとの山えりるさうらう

寒堂

冬至

おあま茂くまうとまうとまうと

孝丸

山下は柳竹あしうら冬そらう

子丸

録

くはくしりたれはうらうらうら  
暖色は強きはうらぬとちた

葉更

まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ  
静乎くま月下うのせりきりきり  
外思うまはるゝ歌又あり細か  
うれやあはれうけもあはれ新か  
うとあはれ手控おきもあはれあ  
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ

蒼乳  
干唯

臘ハ

臘ハお粥も併しお粥つう糖  
臘ハお粥もえくまはあはれあり  
臘ハお粥もえくまはあはれあり  
臘ハお粥もえくまはあはれあり  
臘ハお粥もえくまはあはれあり

菓菜

寒入

寒月

寒月を眺みうつやお女う乳

お乳

寒月を眺みうつやお女う乳

お乳

寒月を眺みうつやお女う乳

お乳

寒念佛

寒月を眺みうつやお女う乳

お乳

冬梅

冬梅を眺みうつやお女う乳



阿比の東に月もくさるる梅  
を椿

薬食  
つたりやまき井とつりて菜食  
厚更

師趨  
山位や師走は果あり雪まじい  
相の安け柳よまじい何えん  
儀あつた臨つてまじい

歳暮  
歳暮のや扇北紅も雪の舟  
深更

きく掃や掃、浮世のまじい川  
隆まじいや果してたぬ地の響  
系な掃や核もまじい鬼もまじい  
田の中は雑つてまじいて年のまじい  
踏くまじい一息はくまじい

り年終常もまじい  
丙寅のまじいまじい吉竹とあつた  
お舞まじい

まじい  
年終常もまじい  
まじい

雜

燈も花もさそくも大二十日  
松風お掛えふくもひく山  
大くちんねの出まはりまふ  
妻やうふふはくくくくく  
おくまておくくくく除夜の柳の

圓更  
蒼和  
子産  
有札

車蓋、二聖お像と願て祈願のふと

乞ひ候へ故翁の思ひを思ひ候へ

月花の道やみおんかへくく

雪更

或人の病ふと

おまふは花もさそくもあはれ今く

不象標

笑まふちきハさおつて此きくら

七面奉納

月花の道やみおんかへくく

無季

客中

雪も水もさそくもさそくもさそく  
はくくくく物や山もあはれ  
るはく竹もさそくくくく

蘭更

送別

送るまふくくくくく

杖突坂

歩りてせん杖突坂のたまり

上証跡

傍向くややみりて神の殿

善光寺

よきまゝに法を説く

中嶽

つらと岩を神は朽る

金洞山

重なる岩木の下乃移る

日光

日影の日に照りて

江島

去りてや夕日の空を

月もたゆむや

老いしや川を

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

冬之部畢

東山芭蕉堂故闡更翁為其中興而  
蒼虬翁千崖翁相繼而起世主此堂  
三翁才力皆足以風靡海內宜乎學  
俳歌者終歸於正風泛是芭蕉堂之  
名愈著于天下矣然闡更蒼虬二翁  
之句出諸選及其集固多膾炙人口

但千崖翁多年漫游主此堂不如二  
翁之久且不及編其集而逝則傳世  
之句亦少矣於此六世之堂主公成  
翁為千崖翁傷其不幸且恐其句終  
致湮沒因集三翁句合刻而欲以傳  
之不朽也意不亦厚耶蓋公成翁子  
師友也予令二子雪瑩可成從學故

此集錄之成徵跋於予，所以不辭  
而書耳

己未仲冬

芳麓

可樵

璽

雪瑩書

璽

安政己未冬十一月新鑄

南無庵藏版

門人訂正

池永大由書

彫工

松月堂魚助

製本

湖雲堂利助



石  
七月十日

